

2019年イサザ資源の現況把握調査結果

亀甲武志・太田滋規・松田直往・孝橋賢一

1. 目的

イサザは、琵琶湖漁業の重要な漁獲対象魚種であると同時に、資源量が大きく増減することが知られている。このため各生活史段階において、資源状態を評価しておくことは資源状態が変動した時に、その原因を検討し、対策を考える上で非常に有益である。そこで産卵、仔魚、稚魚にいたる各段階において目視または採捕調査を行った。

2. 方法

4月上旬から7月下旬にかけて、琵琶湖北湖の数か所において、イサザの生活史段階ごとに目視・採捕調査を行った。すなわち潜水目視による保護親魚数および産卵床数、多層曳き網の10分間曳網による着底前の浮遊仔魚、小型沖曳き網による稚魚の採捕調査を実施し、稚魚期での資源状況を評価した。

3. 結果

産卵調査

2019年4月12日および4月26日に海津大崎地先において、湖岸距離30mの観測測線1本当たりの保護親魚数および産卵床数を調査した。4月12日は325尾、113床、4月26日は220尾、187床の保護親魚および産卵床を確認できた。予備調査として4月上旬から7月上旬にかけて海津大崎の水深50cm地点において約30mの区間を調査した。その結果、4月上旬から5月下旬にイサザの産卵床を確認することができ、4月下旬に最大の産卵床112床を確認することができた。

仔魚採捕調査

2019年5月23日、6月5、25日に海津大崎地先の沿岸から0.2、1および2km離れた

地点において、多層曳き網を各深度(深度3m、6m、9m、12m、15mおよび18m)で1回ずつ約1.5ノット10分間曳網し仔魚採捕を行った。5月23日にはイサザ仔魚を34尾、6月5日には30尾、6月25日には18尾採捕できた。多くのイサザ仔魚は水温10~20℃層で採捕され、調査後半になると、採捕尾数は減少した。

稚魚採捕調査

2019年7月23日に彦根沖および長浜沖の水深20mで小型沖曳き網による採捕調査を実施したところ、1曳網あたり平均約194尾採捕され、そのうち当歳魚は平均192尾であった。過去10年のデータを比較すると2019年の値は2018年と同水準であり2014年に次ぐ高い値であった(図1)。

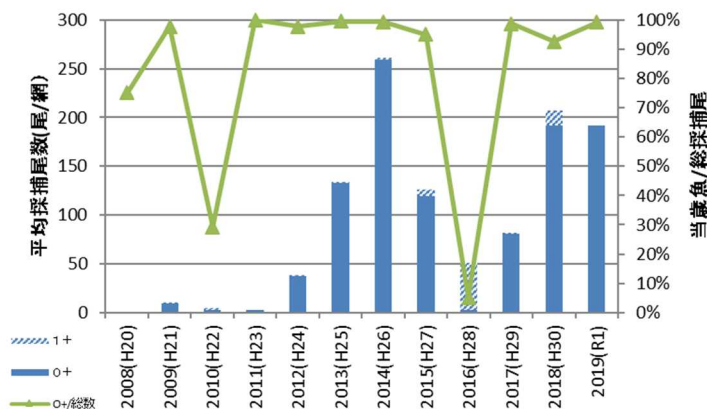


図1 小型沖曳網によるイサザの採捕尾数の年変動